Mode

アンリアレイジが2015年春夏コレクションをパリコレで発表 テーマはSHADOW（光）

一方向からの光によって影が落ちるように、斜めの角度でカットされたアンシンメトリー（左右非対称）なドレス。光と影を表現した白と黒のツートーン。

ドレスにライトを当てると、モデルの手の跡が、白い影の模様に。

カットワークのジャケットの模様に透けたライトの光が化学反応を起こして白い服の上に模様が描かれる。

（上）無数の素材をパッチワークした生地のドレス。手仕事の緻密さが圧倒的。
（左）小さなボタンひとつひとつに至るまでのディテールに「影」を表現。

「服で日常は変えられる」というコンセプトのもと、着る人の感覚を変える服の可能性に挑戦する、日本のファッションブランド「アンリアレイジ」。ブランド名は A REAL（日常）、UN REAL（非日常）、AGE（時代）を組み合わせた造語。デザイナーの森永邦彦は2003年のブランド立ち上げから、従来の服の概念を超える作品で話題をさらってきた。たとえば1000ピース以上の布地をつかったパッチワークの生地や、ボタンで生地が埋め尽くされた服。2010年秋冬コレクションの『WIDESHORTSLIMLONG』では、人間の身体のかたちにとらわれない服を提案。『SIZE』（2014年春夏コレクション）では、さまざまな体型のモデルがショーの舞台上でドレスのサイズを変化させて見せた。ハイテクを使った服づくりも試みる。レーザーカッティングを用いて服の骨格をあらわにした『BONE』（2013年春夏コレクション）。『COLOR』（2013年秋冬コレクション）では、紫外線によって色が変わる染料を衣料に初めて用いて、太陽光の下で色づく服を発表した。
見る人を驚かせ、衣服にまつわる既成概念、着ることそのものへの問いかけを含む森永の作品は、ファッションのみならずアートの世界でも高い評価を受け、美術館でのインスタレーション（設置型作品）としても発表されている。

10年間に渡って東京を拠点に活動し続けてきたアンリアレイジが、その節目となる年に初めてパリでショーを発表した。2014年9月23日に行われた、アンリアレイジ2015年春夏コレクションの会場は、歴史ある美術学校ボザール メルボメーヌ。タイトルは『SHADOW（邦題：光）』。ランウェイに登場したのは、ショートヘアのヘッドピースを身に付けたモデルたち。白いドレスは左右非対称で、スカートは左斜め下に伸び、ジャケットやコートの襟や切り替え部分に影がくっきり現れたように、白黒の生地でコントラストがつけられている。前後が白と黒となっている服もある。「影」の表現は、ディテールにも見られる。たとえばパンプスのヒールの下にとりつけてある黒いソールは、歩くモデルの足元に、影のように沿う。ジャケットにつけられた小さなボタンにも、ひとつひとつ「影」が描かれていて、まるでトロンプイユ（だまし絵）を読み解くような視覚的な愉しみに満ちている。

「影」の動的なファクターは、科学的な素材を用いて表現された。ランウェイの中央に設置されたライトの前に、真っ白なワンピースとドクターコートをまとったモデルが、腰に手を当てたポーズでしばらく立つ。ほどなくして立ち去るモデルのドレスの、手を当てていた部分には、くっきりとした手型の模様が白く描かれている。ほかにも、ジャケットのカットワークが光によって反応して白い服の上に模様が描かれる作品も登場した。

明確なコンセプトと、音響や照明も含めて完璧に提示するプレゼンテーション。これまで日常的な服には用いられなかった素材を開発するプロセスも含めて、森永邦彦の作品には、アート作品としても十分に強いインパクトがあるが、「一点ものの作品ではなく、プレタポルテであること、作品をたくさんの人に着てもらうことに自分のクリエーションの意味と醍醐味がある」と森永は語る。パリコレは、ファッションの都パリで、オートクチュール（高級注文服）に対する、プレタポルテ（高級既製服）を発表する見本市として発展してきた歴史がある。パリコレへの出品を目指さない日本人クリエイターも多い中、森永がこの場を長年の目標としてきた動機は、そこにもある。

「何がエレガントか、美しいか、ということも服にとっては大切ですが、僕は絶対的に、その洋服になにか心を揺さぶるものがあるかどうかということを意識していて、それが時に形とか色とかを超越する瞬間というものがあるんですね。驚きだったり、すごく作り込まれたものに対して感じる感動だったり、そんな、今まで洋服で感じたことのない経験を、見る人に感じさせたいと思っています。その感覚を感じてもらったときに、その人がこの洋服を着てみたいと思ってくれて、そして実際に着てもらえれば、つくり手として最高の状態ですね」。
アンリアレイジのパリでの初めてのショーの途中、光で色が変わる服の登場に、斬新なファッションを見慣れた観客の間から驚きの拍手がおこった。服への哲学と隅々までゆきとどいた手仕事へのこだわりと、最新のテクノロジー。「神は細部に宿る」というアンリアレイジのコンセプトは、そのまま日本のものづくりの精神でもある。80年代、パリコレではコム・デ・ギャルソンや山本耀司ら日本人デザイナーが黒尽くめファッションで「黒の衝撃」と呼ばれた歴史がある。今回、「黒い影を白くする」という逆転の発想で、その伝説に挑んだアンリアレイジ。ショーは多くの観客に、日本のファッションの新たな幕明けを告げるものだった。

Profile 森永邦彦
アンリアレイジ デザイナー。1980年東京都生まれ。早稲田大学、バンタンデザイン研究所卒業。2003年から活動を開始。2005年、ニューヨークの新人デザイナーコンテスト「GEN ART 2005」でアヴァンギャルド大賞を受賞。2006年春夏、Keisuke Kandaとともに東京タワー大展望台でショーを発表し、東京コレクションに参加。2012年個展「アンリアレイジ展 A REAL UN REAL AGE」（パルコミュージアム）。2013年「フィロソフィカル・ファッション2：A COLOR UN COLOR」（金沢21世紀美術館）など、展覧会でも作品を発表。2011年、第29回毎日ファッション大賞新人賞・資生堂奨励賞受賞。

Special cross talk

映画『繕い裁つ人』監督・三島有紀子と デザイナー・森永邦彦が語る、服と映画とものづくり

古き良き時代の洋服づくりにこだわる南洋裁店の二代目をヒロインにした映画『繕い裁つ人』の監督・三島有紀子
エッジなコンセプトの服づくりで、ファッションのみならずアート界から注目されるデザイナー・森永邦彦
一見、全くちがう世界を生み出すふたりに共通するのは、職人的なものづくりへの想いだった

profile 三島有紀子／大阪府出身。18歳から自主上映映画を撮り始め、NHKに入局。「NHKスペシャル」「トップランナー」など、ドキュメンタリー作品を企画・監督。独立後、『刺青〜匂ひ月のごとく〜』で監督デビュー。12年に原田知世、大泉洋主演の映画「しあわせのパン」でオリジナル脚本・監督をつとめる。14年10月には大泉洋、安藤裕子主演『ぶどうのなみだ』を発表。第38回モントリオール世界映画祭のワールド・グレイツ部門に招待。ほか、TVドラマ作品や小説、エッセイの執筆等、幅広く活躍している。
森永邦彦／「アンリアレイジ」デザイナー。紹介記事はp8をご覧ください。

三島　ずっとテーラーの映画をつくりたくて企画を温めていたんです。というのも、私の父親は、数は少ないのですがオーダーメイドでスーツを作っていて、生涯大切に着ていました。テーラーという職人の仕事を幼い頃から感じられる環境にあり、父はそのテーラーに誂えてもらった洋服の素晴らしさを私によく教えてくれました。だから私も服を作る人、ものづくりをする人に対しての意識が高くて。仕立て屋の映画を作ろうといろいろ取材しているところに、このコミック『繕い裁つ人』の市江と出合ったんです。

森永　決まった数着の服で仕事をしてゆくテーラーというのは、すごいですね。僕も、もともとは着せたい人がいて、1人で洋服をつくりはじめた。いまはブランドになって、テーラーの的なものづくりから真逆に見えるかもしれませんが、自分の手で服を作り始めた地点と今とでは、自分の中では地続きなんですね。この映画には共感する部分がたくさんありました。

三島　ヒロインの市江さんという誇り高い職人の生き方に、「自分もこうありたい」と思いましたし、働いている女性やものづくりをしている人に共感してもらえる部分が多いと思いました。市江さんはオーダーの服づくりという仕事を通して、細部までこだわり、最高の技術で作るだけでなく、一人一人のお客さんに対して“その人が一番大切なものに向かってゆける服は何だろうか？”と考えて、服に縫い込んで行く。私もそういう市江さんの生き方に寄り添いたいと強く思いました。

唯一無二のものを生み出す、クリエイターと職人のコラボレーション

三島　職人さんとは、つくったもので示す人だから、この作品では台詞は極力おさえています。もともと私の中では素敵なキャラクターというのはあまり語らない、行動で示す人。

森永　職人さんて、皆さんキャラクターが濃いですよね（笑）。僕のやろうとすることは複雑で、発注も小さな数ということが多い。素材作りなどをお願いするときに、なかなかつくってもらなくて。でも気持ちが伝わったら、本気でやってくれる。みんなスピリットがあります。

三島　映画も、監督の世界観のもとに、いろんな技術を持ったクリエイターたちが集まり団体競技でわっしょいわっしょいと（笑）やってゆく。ここはどうしても自然光で撮りたいとか、結構無理難題もお願いします。でも、逆に火がついて、さらに大変だけど素敵なアイデアを出して、黙々とやってくれたり…というスピリットがあります。森永さんの服はどこにもないというか、唯一無二というか。そういうものを、いろんな技術者たちが支えて生みだしていることが、映画作りと似ている部分がある気がします。

森永　ショーとなると、音楽や照明や、いろいろなクリエイターとの共同作業になります。それぞれの分野の方にいい仕事をしてもらうために自分ができることは、いい服を見せるしかない。そしてこの服を、こう見せたい、という気持ちが伝わった時には、いいショーになる。服が弱いと、みんなテンションがあがらない。

三島　映画の場合は、監督の情熱と粘りはもちろんのこと、監督自身もどれだけこの作品に自分の力を注ぎ込めるのか、ですし、具体的に言えば、どんな人間、どんな芝居をみせたいか、ということだと思います。それがいい作品につながっていく。だから、たとえば撮影現場で、役者さんから“いい芝居を引き出す”ことができると、現場の全てがわーっと盛りあがります。

「神は細部に宿る」。映画とファッションの共通点

森永　劇中で特に印象的だったのは、南洋裁店の顧客が仕立てた服を着て集まる「夜会」で、亡くなったおじいさんの洋服が飾られていたシーンです。着る人がいなくなってしまっても、あの洋服にはいろんなものが宿っているというか、すごく象徴的でしたね。

三島　あのシーンは、「服の力」を感じながら、撮っていました。大切にずっと着られていた服って、その人が宿っている。その服を見ればその人を想像できる。つまりそれが着ていた人の生き方も含めてのスタイルそのものということなんですよね。

森永　服のもともともっている引力ってあると思うんです。誰かが力をこめて一生懸命つくったものって、着る人にも宿るっていうか。

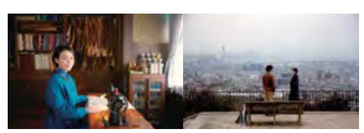
三島　森永さんのブランドコンセプトに「神は細部に宿る」という言葉がありますが、私も本当にそう思うんです。映像もフレームの隅々まで細かくつくってゆく。ひとつひとつ、映画の中で誰がどこで手に入れたものかを探って選んでいるんです。何を選ぶかもその人を表現してくれますから。だから、お団子の材料にもこだわっていて（笑）。そう言った細部や音や光の表現を感じていただくには、ぜひ映画館のスクリーンでみてもらいたいです。

森永　僕がいま着ているジャケットのパッチワークもすごく細かくて、2000ピースくらいの布地をつかっています。質感とか、ネットでは伝わらないものがある。

三島　映画から受け取ったものを帰り道で考える…そんな時間にしたい。100人が100人、同じものを感じなくてもいいんです。お客さまがそれぞれどう感じてくださるかという余白を残しながら、いつまでも心に残る作品をつくりたい。

森永　僕にとっても、洋服をつくって発表して、というのは始まりで、そこから着る人が、どうその服をうけとめてくれるか、というのが醍醐味ですね。

三島　服って生き方の提示だと思う。着る人が「こういう服を着る人になりたい」と思うかどうか。映画も「こういう風に生きたいかどうか」という規準の一つになりうると思うんです。

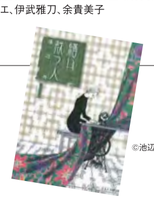


映画『繕い裁つ人』
神戸の街を見渡す坂の上にある洋風の一軒家。「南洋裁店」で、昔ながらの職人スタイルを貫く手作り一点ものの服を縫う市江。神戸のデパートに勤める藤井は、市江にブランド化の話を持ち掛けるが、彼女は全く興味を示さない。先代からの顧客とその人生に寄り添う服は、着る人と市江の間に深い絆を生んでいた。だが、藤井から「自分がデザインしたドレスを作りたいはずだ」という言葉を受け、生まれて初めて市江の心は揺れ動く――。
Data 監督：三島有紀子　原作：池辺葵　出演：中谷美紀、三浦貴大、片桐はいり、黒木華、杉咲花、中尾ミエ、伊武雅刀、余貴美子
1月 全国ロードショー

本紙の読者に原作マンガ単行本をプレゼント

映画の原作となったコミック池辺葵の『繕い裁つ人』1巻（KCデラックス）を3名様にプレゼント。

応募方法：ハガキに、住所、氏名、年齢、電話番号、グランマーブルプレスを入手した場所、『繕い裁つ人』コミック希望と記入の上、ご応募ください。
応募先：グランマーブル京都本社（住所はp13）グランマーブルプレス・プレゼント係　締切：2015年6月末日　賞品の発送をもって当選発表にかえさせていただきます。



©池辺葵／講談社